

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 教育学 ）	氏名	小林 比出代
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
左利き者の書字教育に関する研究			
論文審査担当者			
主 査 教 授 松本 仁志			
審査委員 教 授 難波 博孝			
審査委員 教 授 山元 隆春			
審査委員 教 授 小野 章			
審査委員 教 授 山内 規嗣			
〔論文審査の要旨〕			
<p>本研究は、右手と左手の平等性に基づき、学習者（左利き者）の多様性に応じた学習指導の方法を探求し、その具体的な方策について明示すること、また、文化的な制約等乗り越えたこれからの左利き者の書字教育の在り方を展望することを目的としている。</p> <p>周知のように、文字を書く際の利き手の問題は、特に小中学校の教育現場で切実な課題となり続けているにもかかわらず、左利き者の書字指導に関して、書写教育研究の専門領域において十分な検討がなされてきていない。左手書字への不安や課題が、就学時（文字学習入門期）をはじめとした児童の書写学習に対して集中するのは、これまでの書写教育が左手書字に関する具体的な方策を立ててこなかった（こられなかった）ことが大きな要因となっている。また、現在、日本の教育改革では、20世紀末からの国際的な動きを受け、「ユニバーサルデザイン教育」「インクルーシブ教育」の視点に重点が置かれてきている。「通常学級の中で」「全ての子どもの学習参加を保障する」との教育改革の方向性は、まさに左利き者の書字教育に関する課題を考究する必要性と合致するが、その方向性での左利き者の書字教育研究がほとんど見られない点も課題として捉えている。</p> <p>本論文では、3部構成により上記研究目的に接近を試みている。「第Ⅰ部」及び「第Ⅱ部」は、左利き者の書字教育に関する基礎研究に当たる。利き手及び左利きに関する医学（生物学・生理学）や心理学分野の学際的文献の整理及び他関連学問領域の成果の援用を通して左利き者の書字教育研究における課題を明確にするとともに、左利き者をめぐるアルファベット圏での書字教育の実状をもとに左利き者の書字教育研究に必要な分析視点及び日本における左利き者の書字教育に寄与できる観点を把握している。続く「第Ⅲ部」は、文化的背景や社会的常識及び習慣、ないしは伝統や慣習、もしくは偏見、または多数派文化を重んじる風潮等をも包含した上での、文化的制約を乗り越え教育を向上させていくための基礎研究として、これからの時代に生きる左利き者の書字教育の在り方を展望している。</p> <p>「第Ⅰ部」は「学習者研究」に重点を置き、第1章では、書写教育の見地だけでは解明し難い医学（生物学・生理学）や心理学の分野における利き手及び左利きに関する先行研究について考察し、第2章では、学習者としての左利き者の書字について検討することで、</p>			

左利き者が無理なく書字に臨めるように、右手と左手の平等性に基づき、学習者の多様性に応じた学習指導の在り方を探求することの重要性とその具体的な方策について考究している。

「第Ⅱ部」においては、文字体系の違いを超えて遂行する比較書字教育研究及び比較教育学の見地から、本論考で研究対象とする漢字圏及びアルファベット圏の国々の「目標研究」「教育内容研究」「教材研究」「カリキュラム研究」を分析し、日本における左利き者の書字教育に寄与できる詳細な観点を把握するとともに、本研究課題に必要な分析視点を整理することに努めている。第3章では、日本と同じ漢字圏である中国や韓国における左利きの児童生徒（書字マイノリティ）の書字学習及び指導に対するまなざしの弱さとその原因について、各国の教育指針の現状の約説を通して確認し、第4章では、イギリス（対象はイングランド）におけるhandwritingの教育と日本の場合との教育制度及び教育方法の比較検討から、「右手と左手は平等の関係にある」との確たる見解に基づくイギリスにおける左利き者の書字教育の在り方について明らかにしている。また、第5章では、オーストラリア、フランスにおける左利き者をめぐる書字教育の実状について、書字教育政策に検討を加え、史的変遷の特徴と意義を明らかにしている。

「第Ⅲ部」は、「第Ⅰ部」及び「第Ⅱ部」の総括である。第6章では、左利き者への書字教育に関する漢字圏とアルファベット圏の国々との比較から得られる示唆と課題を提示した上で、「伝統」「文化」の制約から文字を書くことを単にコミュニケーションの手段として割り切れない日本の現状を論じ、第7章では、漢字圏とアルファベット圏における文化や社会性の違いを熟考し、これからの時代の左利き者の書字教育に関する展望についてまとめている。また、現代日本の教育改革で重視する、全ての人を包容した中正で均等な質の高い教育を供する姿勢に鑑み、左利き者の書字及びその指導に関わる研究の今後の至要な視点として、比較教育学と臨床生理学（脳生理学）の両面から検討していく必要性についても試論として展開している。

本研究は、次の3点において、研究的にも社会貢献的にも高く評価できる。

第一に、右手と左手の平等性に基づき、学習者（左利き者）の多様性に応じた学習指導方法を探求し、これまで圧倒的に不足してきたその具体的な方策について、今後の精緻化に向けた検証可能なレベルで明示することができた点である。

第二に、医学（生物学・生理学）や心理学の分野における、利き手及び左利きに関する学際的文献を整理し、他関連学問領域の成果を援用することで、利き手及び左利き者の書字に関する研究を書写教育研究領域にとどまらず多角的に行うための基礎研究として位置付けることができた点である。

第三に、左利き者をめぐるアルファベット圏での書字教育の実状を深く考察し、日本における左利き者の書字教育に寄与できる観点を把握と本研究に関する課題に必要な分析視点の整理を通して、文化的制約等を乗り越えたこれからの左利き者の書字教育の在り方について展望することができた点である。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（教育学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和2年11月12日